



# 新生祭 近思録

## Scene 3

### <ラウバーン・アルディン>

※ このお話は「FinalFantasyXIV 新生エオルゼア」の世界観を元に書かれた二次創作です。苦手な方は閲覧を控えて頂けますよう、お願い致します。

我輩はあの時、死んだのだ——。

ここウルダハで行われているコロセウム闘技大会。

そこで優勝すれば、莫大な賞金が手に入る。その噂を聞いた我輩は、あの子を養う為に、異郷の地アラミゴを出てこの大都市へと赴いた。

しかし、いざ出場してみれば闘技大会とは名ばかりの…血で血を洗う、無差別試合が行われていたのだ。

あれを試合と呼んでいいものか…いや、まさに”死合”であっただろう。

我輩はそこで、生死の境を彷徨ったのだ……。

「…本当に、よく生きていたものだな」

昔の自分を皮肉るように笑った。

かつてコロセウム闘技大会で勝ち取った黄金のトロフィーを握り締め自嘲する。

あの日の我輩は、まだまだ未熟だったと…。

さらに言えば、我輩は英雄でもなんでもない。

表向きは、コロセウム闘技大会の優勝者として、”アラミゴの猛牛”だの”闘技場の英雄”だの言われておるが、我輩は一度敗北したのだ。

それが死合いであろうと、法も秩序もない無差別試合であろうと、敗北したことに変わりはない。

しかし今、その試合は無効試合となり、ウルダハの暗黒史となっている。

我輩が築き上げてきた新しいコロセウムしか知らぬモノは、かつての有様を見て何を思うだろう…。

こうして、何事も無かったかのようにコロセウム闘技大会が続けられるのもナナモ様のご配慮があつてのこと。

我輩が陛下の目に留まったのは偶然だったのか、そもそも我輩がコロセウム闘技大会にエントリーしたときに全ては仕組まれていたのか



……今となっては、裏付ける術は無い。

ただあの戦いが、闘技大会とは名ばかりの八百長であったことを知ったのはずっと後のことだ。

かつて黄金郷とまで謳われた都ウルダハは多くの富豪たちが私利私欲の為に財を投じ、財を投げ捨て、財に支配力を持たせていたのは想像に難くない。

カネで人命すら動かせるのだ、ただカシカ持たぬ闘士たちの闘いなどヤツらにとっては余興に過ぎなかったのだろう。

やがてスリルと興奮を求めてカネをつぎ込み、ルールが撤廃され試合が”死合い”へと変わり…とうとう、相手が死ぬまで闘いが続けられるようになってしまった。

血で血を洗う……これ以上に相応しい言葉があろうか。

勝者は次の相手を殺して血を啜り、力尽きるまで戦い続ける。自身が果てれば、また新たな勝者が敗者の血を身に受けて次の闘いへ……。

そんなことも知らずに、莫大なカネに釣られた愚か者が次々とやってくる。——そう、我輩のように。

富豪は喜んで財を投げるだろう、その莫大なカネを手にした者は後を絶たないに違いない。

そうして、永遠と続けられてきた仮初めの闘技大会…！

こんなものは、試合でも何でも無い！ ただカネ持ちの道楽に、一体どれだけの者たちが果てていったことか……ッ！

そして我輩も、その死闘の渦に飲み込まれたのだ……。

あの日、ナナモ様が大きな涙を零し我輩を救って下さらなければ、そのまま——。

あの日の真実はどうあれ、こうして今の我輩があるのも全てナナモ様と出会ったからこそである。

「ナナモ陛下…か……。ご立派になられたものだ」

こんな言い方をしては、家臣が聞いて呆れるな。

しかし、今でも覚えている。あの日、ナナモ様の一言が我輩にまだ死んではならぬと、小さな掌で魂を包み込んでくれたことを……。

”もう良い…もうよい…立たなくて良いのじゃ…。もう誰かが倒れ、誰かが命を落とすのを見とうないのじゃ。妾がこんなことを始めたばかりに……妾の罪なのは分かっておる、しかしもう、終わりにしたいのじゃ……”

我輩はその時、あの子の…帰りを待っているピピンのことを悔やんでいた。そして、力尽きようとしていた時、ピピンに謝り生を諦めようとしていたのだ。

意識が遠のく間際、駆けてくる淡い薄桃色の髪をした幼子の姿が見えた。小柄で今にも転びそうなほど必死に駆けてくるララフェル族の女子は、身に付けている煌びやかな衣装に気品負けしている。

とてもその姿が、皇女のそれとは思えるはずが無かった。

それでも、震える手を我輩の肩に添えて、大粒の涙を零し、必死に謝り続けている姿を見て…ああ、このような方が指導者であったなら、本当に皆のことを考え、正しき道へ導いてくれるのだろうか……。

そのまま目を閉じ、次に目を覚ましたときには、とある一室に寝かされていたのを覚えている。

そこで、係りの者から先ほどのララフェルはウルダハの女王陛下であることを教えられたのだ——。

「おお！ 懐かしいのう。あの時のトロフィーじゃ！」

「ナ、ナナモ様…！？」

我輩はナナモ様が入ってきていた事に気づかず、慌てて頭を垂れた。

「そんなに畏まらなくても良い。二人だけなのじゃ、無礼講で構わぬ」

「は……御意」

「しかし、コリブリが驚いたような顔をしおって。そんなに驚かなくても良からう？ ドアの前で何度呼んでも返事が無かったのじゃ。許せ、ラウバーン」



ナナモ様は面白いモノが見れたというように、楽しそうにコロコロと笑って見せる。

…我輩はこの御方に何度救われたのだろうか。ナナモ様の御心が安らかであれば、それ以上は望まぬ。ただこのひと時だけでも。

「して、何を考えていたのじゃ？」

「恥ずかしい話ですが、昔を…思い出しておりました」

我輩はトロフィーをテーブルの上に置く。

かつての敗北と、勝利の回想が頭の中を去来していた。色々なことがあり過ぎて、怒濤のように駆け抜けた達成感よりも、どこか懐かしさのようなものが込み上げてくる。

「聞かせてくれぬか？ 当時は妾も必死だった。殆ど妾が強引に話を進めてしまったようじゃからの……」

「いえ…そんなことはありません。我がは…私だけでなくピピンまでも良い待遇を与えて下さいました。」

「じゃーから、畏まらなくても良いと言うておるのに！」

ナナモ様は口調は怒りながらも、どこか楽しげである。

こうして我輩の部屋を訪ねてくるときは何か話をしたい時が多い。今回は、どんな用件であるかまだ分からぬが……。

ナナモ様がテーブルのトロフィーを手に取り、じっと見つめている。

「妾がコロセウム闘技大会を発案したのじゃ。このウルダハには力が足りぬ。いくら財を成せど、力がなければナルザルは領かぬ。その力を得る為に、コロセウム闘技大会を催し有能な兵士が育ってくれることを願ったのじゃ。確かに一定の力は得たのかもしれぬ。ただ、その力は相手を捻じ伏せるだけの力に他ならなかった。そんなものは真の力ではない。しかし…闘いは闘いを生むだけで、誰かが傷つき誰かが命を落とすようになってしまった……」

「はい…。それはおおよそ共和派の悪意が介入していたはず。ナナモ様が非を感じる必要はありません」

「しかし、この闘技大会を敢行したのは妾の罪。勝手なことを言っていたのは分かっている。じゃが、もう見とう無かったのじゃ。誰かが傷つくのも、誰かが命を落とすのも…。妾が求めた力は、そういうものではなかったのじゃ…！」

「”王たるもの3つの力を統べよ” その3つ目の力は…暴力ではなく、業力」

「そうじゃ。そして、このウルダハの守護神ナルザルの黄金の天秤には、二つの力が計られておる。商と業…繁栄とは恐ろしい…。ウルダハの天秤は商に傾き過ぎておる。ナルザルの御許がこれでは、顔も上げられぬのじゃ…」

我輩は、当時のことを思い出していた。

ナナモ様が我輩の内に見た力、それが”業力”だったのだ。

暴力という悪鬼に囚われぬ、果報を生じる業因の力。

それを我輩は、死闘の果てに開眼させた——。

「妾の罪は消えぬ。じゃが、当時の闘技大会を変えるには、観客を…そして共和派をも黙らせるには、どうしても結果としてお主には優勝してもらわねばならなかった。それも、ただの勝利ではなく——」

「長年続いたこのおかしな闘技大会に終止符を打つ、新たな”英雄”として」

我輩が言うのはおかしな話だが、表向きは、圧倒的な力を見せ付けて優勝した、コロセウムの英雄ラウバーンとして歴史に名を刻んでいる。

しかし、裏ではその力を誇示し、コロセウムを乗っ取ったのではないかという噂も吹聴された。これは、共和派か、あるいは悪意ある観客の誰かが流したものではないかと考えている。

だがそれも、ナナモ様の描いたシナリオだった。

民衆とは、讃歌も歌えば悪意も滲み出る。それが人であり、民の自由であると、ナナモ様はその噂もすべて受け止めたのだ。

そして、人の記憶ほど自然淘汰されていく。やがて、強烈な印象を残した「コロセウムの英雄ラウバーンの伝説」が広がり始め、悪意ある噂は鳴りを潜めていった……。



「のう、ラウバーン。お主の力は、今では不滅隊に浸透し新たな闘い方として妾も気に入っておる。それはあの日話してくれた、故郷の力なのか？」

「はい…。我が故郷アラミゴに伝わる”青魔術”というシロモノです。この力は、相手を捻じ伏せる為のものではなく、相手の力を尊重し競い合うもの。別称”ラーニング”と呼ばれております」

ラーニング――。

兵士、闘士、武士、戦士…戦場ではあらゆる敵と遭遇する。そのいずれの猛者には必ず得手としている”技”があるのは云うまでもない。

青魔術は、その技を一時的に模倣することが可能なのだ。その勝敗は、おおよそが僅差でつく事が多い。稀に使い手の潜在能力いかんでは大きく形を変えることもあるが、いずれにせよ同じ技のぶつかり合いになる。

そこで勝敗を分かつのは、力量ではなく業力の差。多くの経験をして来た者が一瞬の駆け引きに勝る。

圧倒的な力の差であれば、戦意喪失や、完全なる敗北にもう一度相手に挑戦しようなどという気概は無くなってしまいうだろう。

しかし、僅差の勝敗であれば、またお互いに成長していける。勝者は今回の勝利は”時の運”としてさらに自らを研鑽するであろう。

逆に敗者は、悔しさと同時にもう一息という手応えを感じ、また新たに修行に励む。

それが”業力不滅”という、我がアラミゴに伝わる古武術…青魔術の信念である。

「しかし当時の我輩は、コロセウムの惨状を見て我を失っていた。かつて青魔術で鍛えてきた闘い方が全く出来なかったのだ。当然の如く、血に飢えた猛者の一撃を交わせる術もなく、ことごとく身に受けてしまう」

果敢に迫ってくる闘士ではなく、死に物狂いで襲い掛かるような相手にここは闘技場ではなく、戦場なのではないかと錯覚していたほどだ。

どこかで甘く見ていた。これは試合であって、死合ではないのだと…。

我輩も戦場へ赴いたことはある。そこでは負けまいと、死ねないと自身を奮い立たせ闘った。それでもなお、相手の闘志に敬意を。

ぶつかり合う闘志に偽り無し。それが”青魔道士”としての闘いだった。

「じゃが、再びコロセウムに上がったお主は別人のようであったのう。見達えるように強かった」

「それは……ナナモ様のお陰なのです」

別室で身体を癒していた我輩の見舞いに来てくれたナナモ様。

そこで我輩に思い出させてくれたのだ。故郷アラミゴと、背負うものの守り方を…。

”そなたの身体に刻まれた数々の傷…。それは全て、背に守るモノの為に受けたものであろう？ かのアラミゴの民の闘い方は聞いておる。常に切磋琢磨し、お互いを認め合い、共に成長しようという気概。妾はその心意気が好きじゃ”

相手を倒すことが至上目的ではない。屍の上に築き上げた城など、何の意味もない。ましてや、屍を乗り越えてきた英雄など誰が称えるというのか。

例えそのような英雄が選ばれる時代があろうと、我輩はそんな英雄になど……興味はない。

”そなたに頼みたい。あの闘技大会で優勝して欲しい…！ もちろん、あのような闘い方ではなく、アラミゴの流儀に従いそなたの闘い方で。その暁には、誰憚られることのない地位を約束する。そして、そなたの大切な者…ピピン・タルピンを我が皇室が持つて成そう。心配は要らぬ、立派な闘士になるまで面倒を見る”

その提案に面食らった。我輩のことを色々と調べたのだろう。

しかし、闘技大会での涙。そしてこの手厚い介抱。さらには見返りをも用意してくれた。



そこまで我輩に託したい何かがあるのか、それとも何か裏があるのか——。

”そして……コロセウムの全権を、そなたに託したい——”

我輩は一瞬でも、この御方の好意を疑ってしまったことを恥じる。

この御方は、どこまでも純粹で、どこまでも国を想っていた。

そして自らの無力さを知り、そこから逃げ出さずに、心から助けを求めたのだ。

”身の程を弁えろ”とは、王族の使う言葉だと思っていたが、どうやら違うらしい。このお方は身分も、価値観も、偏見をも物ともせず、自らを行使出来るのだ。

そのような御方が、我輩に託してくれている……。

”妾はそなたにこんなことくらいしかしてやれぬ。妾はただ、このウルダハを変えたいのじゃ。それだけなのじゃ——”

我輩は、その震える肩に手を添えていた。そして、ピピンの姿を重ねていた……。

この小さな肩に、どれだけ多くの重圧を感じているのだろう——。

この小さな背中に、どれだけ多くの決意を背負ってきたのだろう——。

この小さな身体に、どれだけ多くの想いを抱いているのだろうか…。

我輩は今一度、コロセウムの覇者となるべく立ち上がった。

「しかし、そう簡単に勝てるものならここまで泥沼化することは無かった。辛勝とは良く言ったものだ」

「じゃが、一定の興奮を上回ると人は過程を忘れ、清々しいほど強烈な結果が後の記憶となる。そう、最終戦の記憶がお主を英雄へと押し上げたのじゃ」

全てが接戦、全てが僅差の勝敗。その消耗は激しいものだ。

勝敗は速さと早さが分かつ…それは裏を返せば、青魔術が長期戦向きではないことの証明だった。

一戦一戦が長引くことは無いが、無差別試合となっていたコロセウムは一体、何人倒せば最後の一人になるのだろうか…。

我輩は、このコロセウムに響くように声を張り上げる。

『闘いたいヤツは降りて来い！ 我輩はここにいる！ 血に飢えた者、力を証明したい者、腕に覚えがある者は我輩が相手になるぞ！  
うおおおおああああ！ 全員まとめてかかってこいッ！！！！』

この闘いに審判など居ない。どこぞでエントリーしてきた者たちが次々と入場してきて、一対多数になることもあった。

それを利用して、我輩は猛者たちをあぶり出す。血気盛んな猛者たちは煽ればいくらでも沸いて出るはずだ。

気がつけば、我輩の周りには数十人規模の猛者たちがひしめいている。短期戦で一対一を得意とする青魔道士の闘いには、一番不利な状況だ。

だが、ここで負けるわけにはいかぬ。我輩はこれが最後の闘いであることをもう一度噛み締め、猛者の群れに分け入っていった…。

「そして最後の最後…。我輩は高揚にも似た気持ちを抱いていた。ただ勝つだけでは駄目なのだ。この悪弊を断ち切るには、もっと大きな…。誰が見ても納得せざるを得ない力の証明が必要だった」

だがそれは、相手を捻じ伏せる力であってはいらない。

その時、呪剣ティソーナが我輩の想いに応えてくれた。そうするのが当然であるかのように、自然と両手を天高く突き上げる。

我輩の慟哭と、ティソーナが共鳴したとき…天井をも貫かんとする巨大な剣が具現したのだ。

その神々しさたるや、ここに居る全ての者たちを魅了していた…。

「その力は、お主の熱き魂が生んだ刃…ブレイブハート。言うなれば”究極の抑止力”といったところかのう」

猛る闘士たちも、囁いていた観客たちも閉口し呆然と見上げていた。人の身に余るこの力は、ナナモ様の言葉を借りれば「究極の抑止力」。



見るもの全ての戦意を喪失させ、その巨大な剣の前に平伏す…。

それはまさに、ナナモ様が願ひ欲した業力に相応しい力の顕現だった。

『こんな馬鹿げた闘いはもう終わりにするのだッ！ 闘士たちよ、己の騎士道を見失ったか！ 勝者と敗者は戦友、飽くなき研鑽こそ我輩たち闘士が唯一共有した熱き魂だったはず！ 今宵、コロセウム闘技大会は閉幕する…しかし！ 新しき闘技大会を正しき騎士道を持って我輩が作り直す！ これまでの悪しき闘技大会は…これで終わりだああああああああッッッ！！！！』

閉会宣言をするように、我輩は巨大な剣を振り下ろす。

もちろん、それでコロセウムが崩れ落ちることは無い。ラピスラズリとアイオライトの二つの光が煌いて、辺り一帯を包み込んだ。

我輩は力を出し切り、その場に倒れこむ。駆けてきたナナモ様は、安堵の表情を浮かべ、我輩の肩に手を添える。

”よくぞ…よくぞ成し遂げてくれた。約束どおり、賞金とそなたの地位を用意しよう。もちろんピピンも迎えに行く。本当に、大した男じゃ…。ゆっくり、休むがよい…”

ナナモ様の涙は、一度目とは違い温かなものであった。

やり遂げたことに安堵した我輩は、この温もりに身を委ねようと目を閉じたとき、ナナモ様は最後にこんなことを呟いた。

”……妾の手には二つの力すら身に余る。この大きな力はお主に託したい。共に、ウルダハを支えて欲しい……”

輩はこの時、生涯を懸けてナナモ様にお仕えすると忠誠を誓う。

この御方の矢面には誰かが立ってやらねばならぬ。

それが我輩なぞで良ければいくらでもこの身体、ナナモ様の手となり足となり、目となりましょう――。

「お主が意識を失ってから、会場は拍手喝采であったぞ。戦っていた闘士たちはお主を讃え、医務室まで運んでくれた。ようやく妾は、この永きに渡る闘いが終結したと思えたのじゃ」

それから、コロセウム闘技大会は新しく生まれ変わった。

公正な審判を設け、新しいルールの新設、トーナメント形式の導入、さらには定期大会と、訓練を目的とした闘技大会の両方面の展開に発展させた。

そして、今では不滅隊へ入隊する登竜門として、この闘技大会が一つの側面を見せるようになっていた。

それは何を隠そう「コロセウムの英雄ラウバーンの伝説」が、時を経て尾ひれが付いてしまったせいだ。

しかしそれは、かつてのような悪意ある噂の類ではなく、皆が我輩を目標とし、不滅隊の信念に共感してくれたからであると思っている。

願ってもないことだ。そうして日々、稽古に励む姿は故郷アラミゴの闘士たちを彷彿とさせた。

我輩がナナモ様と共に歩み始めて、本当に良い結果を生めた。

「改めて礼を言いたい。本当に感謝しておる、ラウバーン。ありがとう」

「頭をお上げくださいナナモ様。我輩だけではここまで来ることは出来なかったのです。共にウルダハを支えて欲しいと頼まれ、今日までやってきました。我輩を救ってくれたのはナナモ様なのです。」

我輩は真に感謝を述べる。嘘偽りのない本心である。

ナナモ様は、一度頷くとふと天井を見上げた。

「のう、ラウバーン。妾たちは色々なことを変えてきた。それは結果として過去に刻まれた。これからも共に、たくさんの変えていくのであろう。そう、今を変えてきたからこそ、過去が積み上げられていく。そうして、新しい未来が築かれていくのじゃ」

ナナモ様が何を言わんとしているのか、すぐに理解出来なかった。



ただ何か、ナナモ様にとっては大きな意味を見出しているようにも見えて、我輩は黙して聞き役に徹していた。

「妾たちの今は、遠いウルダハの歴史から見れば、ほんの一瞬なのかもしれぬ。今まで妾は、より良い未来を築くために多くのことを、今を変えてきた。もしも必要ならば、この身を投げ打ってでもウルダハを変え、民をより良い未来へ導けるように変えるつもりじゃ。かつて、闘技大会をお主と共に変えようと決意したときも……」

ナナモ様は時に自分の掌を見つめ、開いては閉じ、また結んでみせる。それは自分の言葉を噛み締めるようでもあり、何かを確かめるような仕草にも感じられた。

「今を変えるということは、過去を断ち切ることだと思っていた……。じゃが今は違う。妾は、遠い過去と…遠い未来を繋ぎたい。新生の刻はいわば”結び目”じゃ。その結び方を変えているに過ぎぬ。ならば、妾はこのウルダハを、これから生まれてくる新しい民の為に繋ごう」

「結び目、ですか…。ならば我輩は、ナナモ様のご意志を結ぶ手となりましょう。これまでと同じように、これからも……」

「うむ！ まずは、14年の未来を目指そうと思う。先を見据えて、その未来と結ぶためじゃ。14年は長いぞー。言質は取ったからのう？ それまでは根を上げるでないぞ、ラウバーン」

「それは構いませぬが……。14年……？」

ナナモ様は第十七代国王であらせられる。17年なら分かりもするが、一体14年の意味とは……。

「わ、妾がお主と出会ったのが齢14の時だったからじゃ！ これから…これからの新しい14年を共に作りたい…のじゃ……」

ナナモ様がなぜか語尾を詰まらせる。

「失礼します！ そろそろ式典の時間でございます！ ナ、ナナモ様！？」

突然入ってきたのはピピンだった。ナナモ陛下がいるとは思って  
いなかったらしく、あんぐり口を開けている。

「ピピン…部屋に入るときはノックを2回といつも言っておるだろう」  
「くくく…、あは、あははははは。良い。ピピンもラウバーンと同じ  
顔をするのだな。くくく」

ナナモ様はピピンの驚いた顔を見て、声を上げて笑う。  
そんなに似ているのか…？ コリブリがどうか言っていた気がするが。

「ピピン、ナナモ様には我輩がお供する。配置の指揮を頼む」  
「はっ！」

ピピンは不滅隊式敬礼をナナモ様に向けると、足早に駆けていく。  
やれやれ……。日々研鑽を積み、将校の地位まで与えられたのだから  
もう少し落ち着いて欲しいものだ。

「ラウバーン、そんな顔をするでない。ピピンも立派に成長しておる。  
あの子が不滅隊を背負うようになった時、今日この日がその未来と  
繋げることが出来たと実感出来るはずじゃ」  
「……そうですね」

我輩はピピンの後姿を見送りながら、ナナモ様の言葉を受けて  
穏やかな気持ちに変わっていく。

「のうラウバーン。昔、お主は言ったな。王たるもの3つの力を統べよ。  
確かに王政を築くには必要なことじゃ。しかし、遠い未来……妾は、  
権も財も業も無い新しい世が訪れてくれたらと思うのじゃ。もちろん、  
それだけでは秩序は保たれぬ。必要なのは”天秤”……ウルダハの神  
ナルザルが据えた黄金の天秤が示す本当の意味は、他の力のバランス  
なのではないか」



「新しいカ、ですか……」

「今はまだ、それが何なのか分からぬ。妾たちが知らない新しいカなのか、それとも今まで気づかなかった、蔑ろにしてきたものなのか…。それが分かるまでは長い道のりかもしれぬ。共に、来てくれるか…？」

ナナモ様は振り返り、少し不安そうに、だけれども懇願するように真っ直ぐ我輩を見つめてくる。差し出された手は少し震えていた。

迷いは無い。ナナモ様に頂いたこの命、この身果てるまで陛下にお仕えする所存である。

「御意。ナナモ様の仰せのままに、ウルダハの未来を繋ぎましょうぞ」

差し出された手を、しっかりと握りナナモ様を肩に乗せる。  
まだ我輩の肩には、この御方の重圧に比べればまだまだ軽い。

ナナモ様を肩に乗せるのは我輩自身の戒めでもあるのだ。

――。

――。

「栄光と繁栄の都、黄金郷ウルダハに集いし熱き魂を持つ者どもよ！  
これまでの復興に尽力してくれた多くの民、不滅隊の闘士たち、そして  
我が不滅隊に入隊してくれた猛き冒険者たちよ。その功を祝し、宴を  
開催する！ 今宵は無礼講である、存分に楽しむが良い！」

拍手喝采、異体同心。今宵ばかりは骨を休め料理に酒に酔いしれる。

これから解決せねばならない問題は数多くあるが、ひと時の休息といこう。

宴は誉れなことだ。そこには権も財も業も、あらゆる力を介在させぬ。それがたとえひと時の夢だったとしても、この時間は我々にとって必要なのだ。

だからこそ、一つだけ、この場で言わなければならないことがあった。

「今宵は新生の刻。これを境に、我々は変わらねばならぬ……いや、  
変えねばならん。人も、国も、今この時から…。変えることはそう  
難しいことでは無い。全ては決断なのだ。勝敗は早さと速さが分かたつ…。  
これから生まれるウルダハの新しい命の為に、自身には何が出来るのか。  
考えて欲しい……」

それからナナモ様は軽く手で我輩を制す。

「第十七代国王、ナナモ・ウル・ナモである。そなたたち民を妾は  
誇りに思う。ゆえに、これから生まれくる新しい命のためにも、この  
ウルダハを誇れるように…。それは過去を断ち切る為ではない。妾は、  
遠い過去と遠い未来を繋ぎたい。100年先、1000年先に生きる人々に  
橋渡しが出来るように……。小さなことから構わぬ、今を生きる  
妾たちが手を取り合い、国も民もお互いに切磋琢磨していく未来を  
築いていきたいのじゃ」

ナナモ様のこの願いは、多くの問題を抱えるウルダハにとって理解を  
得るのは難しいものかもしれぬ。

遠い未来に、それが叶えられる保障も無い。

しかし――。

パチ、パチ、パチ……。

まばらに拍手が起こり、次第に大きくなっていく喝采に我輩はこの  
ウルダハを第2の故郷にしたことを誇らしく思った。

ナナモ様の安堵の表情を見て、我輩はこの御方に仕えられることを  
最上の喜びと知った。

今度は我輩が、ナナモ様にご恩を返す時――。

この身果てるまで、我が主に忠誠を誓おう……。

我輩は今一度、盛大に宴の開催を宣言するのだった。

Scene3 Raubahn Aldynn...end.



～あとがき～

こんばんわ、ユーラです。

今回は新生祭 近思録 Scene3<ラウバーン・アルディン>を最後まで読んで下さってありがとうございました。

このお話は、公式イベント「新生FFXIV キャプションコンテスト」用に執筆した【新生祭 言行録】と【新生祭 見聞録】と同じシリーズの作品です。

全3篇からなる新生祭のお話ですが、今回は【新生祭 近思録】と銘打っております。

いずれも、3国の党首が新生祭にて演説するという舞台にちょっとしたショートストーリーを添えて構成したお話です。

どこから読んでもらっても構いませんし、近思録が前編や後編といった位置づけになるものではない、ということも先に明言しておきますね。

同様にまだ他のお話を読んでいなければ、ぜひ3つのお話を読破して頂いて、感想などなど送って頂いたり、妄想などして頂けたら嬉しいです。

さて、今回の近思録ですが「今」（現在）をテーマとしたお話です。

このキーワードは捉え方によっては様々な印象を受けるかと思いますが、私はこう思うのです。

今（現在）とは、過去と未来を繋ぐ一瞬の時であると。

作中では、ナナモ様が”結び目”と例えていましたが、また適した言葉も人によっては千差万別だと思います。

言行録が「過去」、見聞録が「未来」だったのに対して、「現在」である近思録は、そのどちらの雰囲気も取り入れる必要がありました。

私自身の見解に則るなら、今は過去の積み重ねであり、今は未来を繋ぐ架け橋であります。なので、必然的に過去と未来の両方のお話を織り交ぜてあります。

さらに、一瞬というイメージしづらい時間をナナモ様の”結び目”といった言葉で象徴的にしてみました。

ただ他のお話に比べて、変り種要素は無いのでインパクトには欠けていたかもしれません。

その分、ラウバーンの心の動きだったり、ナナモ様の想いだったりを通じて、情緒的な作風にしてあります。

何か一つでも、考えさせられたり、本当にそうなんだろうかと思索して頂けたなら嬉しいなあと思います。

あと私は旧シナリオ（新生前）を読んでいないので、この頃のお話ってホントは存在しているのかもしれませんが。（どこかでコロセウムを巡るウルダハのお話があったようなことを見た気がする…）

なので、公式ではすでに乗り越えてきたストーリーがあったとすれば、こんな展開もあったのかな？ というIFとして捉えて頂ければ幸いです。

公式アートブックも買ったので、次は設定資料集お願いします！（切望）

現在というテーマで、ラウバーンの視点を借りて自身の過去を振り返り、未来を見据え、ナナモ様と共に今を歩いていく一人の闘士のお話でした。

最後に、エオルゼア時間ではなくリアル時間で執筆した順番が、言行録→見聞録→近思録という順番です。

なので、あとがきに関してはその時間軸でお話していることもあり、当時の脱稿した後の気分で書いていますので、その辺ご了承くださいと思います。

それでは、ご意見・ご感想がありましたら、[こちらの](#)フォームよりお気軽に送ってくださいね。

また、他のお話は下記リンクよりぜひご覧ください。

[【新生祭 言行録】](#)      [【新生祭 見聞録】](#)

それでは、これにて2014年の新生祭は閉幕となります。

またエオルゼアでお会いしましょう！

今年はホントに14の年でした、来年もF.A.T.EにFanフェスに楽しみにしてます(笑) あ、その前に3.0のイシュガルドですね！

1周年おめでとうございました！

...Yuura,Erisell(Ramuh) 2014.12.30 Tue





新生祭 近思録 Scene3

<ラウバーン・アルディン>

記載されている会社名・製品名・システム名などは、各社の商標、または登録商標です。

Copyright (C) 2010 – 2014 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.

この作品の掲載は、スクウェア・エニックス様より忠告があった場合  
即刻掲載を取り下げることをお約束します。